

次の日曜日には、7月の教区報が各教会に配布されますが、私とその巻頭言を書いています。2か月前から、その文章をどうするか、考えていました。考えた末、そのタイトルは「人は死ぬと1冊本を残す」にしました。これは詩人の長田弘という人が、以前NHKの視点論点で語っていた言葉です。

今年の4月、熊本で原寛司祭の葬儀があり、私は通夜の祈りに出かけましたが、受付で「こころの泉」という、原先生が佐世保時代に毎月書かれた伝道文書をまとめた冊子を受け取りました。その時、他に9年前に亡くなった太田國男執事の本も3冊いただきました。私もその本の一部に文章を書いたこともあります。私も1冊持っていたのですが、人に貸したままで、北九州に引っ越したので手元に亡くなっていたのです。それを話したら、3冊下さり、現在関わっている教会にも寄贈しました。

今回、C年の特定8の説教を作るのに、以前の説教を振り返ってみると、「泣いて馬謖を斬る」ということわざを説教題につけていました。実は、このことわざを私が最初に聞いたのは、亡くなった太田執事からでした。これを太田執事は、親しき中にも礼儀あり、公私のけじめをつけなければならない、という意味で話していたように思います。今日の福音書の後半には、「弟子の覚悟」という見出しがついています。今日の旧約とも関連がありそうなので、その話をしたいのです。

それで、今日も、先ず、三国志の中に出てくる「泣いて馬謖を斬る」ということわざについて話します。三国志というのは、中国で紀元200年頃から、北に魏、東に呉、そして西に蜀という三つの国が、緊張関係の中で、安定した中国ができていったお話です。特に、北の魏をまとめた曹操という人物がそれを大きな国にしてしまったので、呉と蜀が協力して戦った、「赤壁の戦い」というのが、一番有名な戦いで、これを題材にした、「レッドクリフ」という映画ができて、皆さんも見たことがあるのではないかと、思います。

この赤壁の戦いの時、天才的な軍師として諸葛孔明という人物が登場します。西の蜀のリーダーの一人です。やがて、諸葛孔明は年とって、また魏と蜀が戦いをするようになります。これを街亭の戦いと言いますが、この戦いの時、諸葛孔明の弟子馬謖が、孔明の指示に従わず、山の上に陣を敷いたため、敵の魏が、水を汲む道を断ったことで士気が落ちて、負けて、大勢の犠牲者を出してしまいました。諸葛孔明は、自分の指示に従わず、敗戦になった責任が馬謖にあることを知ります。彼の愛する弟子の馬謖ですから、処罰するのは辛いことですが、軍隊の規律を保つためには、私情をはさんではならないということで、諸葛孔明は馬謖を処罰しました。このことから、「泣いて馬謖を斬る」ということわざができました。規律を保つためには私情を挟まず、違反者を処分することを、そのように言いました。

さて、今日の旧約と福音書は、師匠と弟子のことについて、いろいろなことが書かれていました。福音書の最初に、「イエスは、天にあげられる時期が近づく」という表現が出てきました。イエス様の受難ということ意識してのものかもしれません。しかし、これは、今日の旧約のエリヤが、弟子のエリシャのしている前で、火の戦車に乗って、天に昇っていった、ということ意識してこのように表現しているとも読めます。何せ、イエス様と、850年前の時代のエリヤはよく似ているのです。

今日の福音書の場面はサマリア付近です。サマリアの人々がイエス様を歓迎しなかったため、弟子のヤコブとヨハネが、「天から火を降らせて、焼き滅ぼしましょうか。」というひどいことを言います。このような過激な発言が原因で、彼らはイエス様から「雷の子ら（ボアネルゲス）」というあだ名をつけられるのですが、それだけではありません。天から火を降らせる話はエリヤについても出てきます。

旧約聖書の時代、紀元前の850年くらいですが、当時の北イスラエル王国の首都は今日の福音書と同じサマリアでした。先日ダビデやソロモンの映画を紹介しましたが、ソロモンの子どもの時代に、イスラエルは南北二つに分かれて、北イスラエル王国と、南ユダ王国に分かれたのです。この北イスラエル王国の王様アハズヤが、宮殿の屋上の部屋の欄干から落ちて、それがもとで病気になりました。それで、エクロン（エクロン）の神バアル・ゼブブという偶像の神様に、この病気が治るかどうかが尋ねるように使者をおくりました。

ところが、国の王様が偶像の神様にお伺いをたてようとしている、ということを知ったエリヤが、王様の使者と問答をすることになります。そして最後は、王様から遣わされた隊長と部下50人を天から火を降らせて、2度にわたって焼き滅ぼした、という話があるのです。神様の言いつけにそむいて、他の神様にお伺いを立てたサマリアの王様を神様が罰したことを弟子たちは知っていたのです。だから、イエス様を受け入れないサマリアの人々を、あの昔にエリヤがやったように、天から火を降らせて、焼き滅ぼしましょうか、と弟子たちが言ったのは、このサマリアの土地に由来して、イエス様をエリヤの再来のように理解していた弟子たちから出た言葉です。

しかし、一番興味があるのは、今日の旧約聖書で、エリヤがエリシャに弟子になるように声をかけた時のふたりの会話と、イエス様の弟子になろうとした人たちとイエス様の会話の違いです。

エリシャはエリヤから声をかけられると、「わたしの父、わたしの母に分かれの接吻をさせてください。それからあなたに従います。」と言います。そしてエリヤがそれを許可すると、接吻どころか、ひとくびきの牛を屠り、牛の装具を燃やしてその肉を煮て、親しい人々に別れの食事をしてから、エリヤの弟子になりました。

ところが、イエス様に声をかけられた人が、「主よ、まず、父を葬りに行かせてください」とか「家族にいとまごいに行かせてください。」とか言いますと、イエス様はそれを許さないのです。「死んでいる者たちに、自分たちの死者を葬らせなさい。あなたは行って、神の国を言い広めなさい。」とか、「鋤に手をかけてから後ろを顧みる者は、神の国にふさわしくない」ということで、あのエリヤのような優しさはありません。とても厳しい命令です。

ここでちょっと説明しておく、と、「死んでいる者たちに死者を葬らせなさい」というのは、そのままでは分かりません。死んでいる者たちとは、イエス様が示すいのちの道に従わない人たち、ということです。そして「鋤に手をかけてから後ろを顧みる」というのは、牛に引かせて畑を耕す時、使うのが鋤です。この仕事をする人は、右手に鞭を持ち、左手だけで扱うので、しっかり前を見ていなければならないのに、後ろを見ていたら仕事にならない、ということを行っています。

神様の仕事をする事になった時には、私情をそこに差し挟むようなことはしてはならない、ということでしょう。

今日の福音書には「弟子の覚悟」という見出しがついていますが、このような厳しいことを、イエス様は、このあとも、14章と18章で語っておられます。

14章には、「弟子の条件」という見出しになっています。

◆弟子の条件

25:大勢の群衆が一緒について来たが、イエスは振り向いて言われた。26:「もし、だれかがわたしのもとの来るとしても、父、母、妻、子供、兄弟、姉妹を、更に自分の命であろうとも、これを憎まないなら、わたしの弟子ではありえない。27:自分の十字架を背負ってついて来る者でなければ、だれであれ、わたしの弟子ではありえない。28:あなたがたのうち、塔を建てようとするとき、造り上げるのに十分な費用があるかどうか、まず腰をすえて計算しない者がいるだろうか。29:そうしないと、土台を築いただけで完成できず、見ていた人々は皆あざけて、30:『あの人は建て始めたが、完成することはできなかった』と言うだろう。31:また、どんな王でも、ほかの王と戦いに行こうとするときは、二万の兵を率いて進軍して来る敵を、自分の一万の兵で迎え撃つことができるかどうか、まず腰をすえて考えてみないだろうか。32:もしできないと分かれば、敵がまだ遠方にいる間に使節を送って、和を求めよう。33:だから、同じように、自分の持ち物を一切捨てないならば、あなたがたのだれ一人としてわたしの弟子ではありえない。」

太田先生が19年前に出した本のタイトルが「自分の十字架を背負って」でした。それはマタイによる福音書からの引用でしたが、先週の福音書にも出てきたし、今引用したルカ14章の「弟子の条件」にも出てきました。

その後の、塔を建てたり、戦争に行ったりする話はとても面白いのですが、1971年に1度だけ千人を超えた教区の現在受聖餐者（現在堅信受領者のこと）が、一昨年末には567人に減ったことを教会カレンダーにも書きました。その後、昨年末の数字を聴いたら、547人でした。減ったのならそれに対応した対処を考える時でしょう。この聖書の箇所は、大変示唆に富んだ教えだと思います。

自分の身内や昔からの仲間を大切にすあまり、その感情が優先してしまい、神の国、神様の前の公正ということ押し曲げることを行っていないか。それを戒めておられるのが、イエス様の弟子に対する覚悟や条件で言われていることです。

今回、太田先生の本や、語っていた言葉、特に彼から教えてもらった、「泣いて馬謖を斬る」ということを今思っています。三国志で、諸葛孔明が愛する弟子を泣いて斬ることにしたことは、それは、何も昔からの友人との関係を切ってしまう、というのではなく、親しき仲にも礼儀あり。是は是、非は非。良いことはよいこと、悪いことはわるいことと、公正無私に判断すること。道理によって正しく判断する態度を言うことだろうと思います。

単なる思い付きで振り回されるのではなく、先ず腰をすえて考え、計算し、泣いて馬謖を斬る、ということ私たちの教区も今求められているような気がするのです。